

息栖神社と御船祭

ご祭神を導く、
12年に一度の船出



12年に一度おこなわれる鹿島神宮の「御船祭」^{みふねまつり}。壮麗な水上渡御^{とぎよ}で約100隻の大船団を導くのが、息栖神社の先導船です。その知られざる役割と祭りの一日を紹介します。(写真は息栖神社前の常陸利根川)

今月の
おしらせ

かみす健康マイレージ…………… P6
公立・私立保育所(園)などの一斉募集…………… P7
かみすフェスタ2026 …………… P24

広報かみすが
動き出す

アプリをダウンロードし表紙にスマホをかざしてください。詳しくは12ページ



アプリ
[COCOAR]



特集

息栖神社と御船祭

ご祭神を導く、12年に一度の船出

鹿島神宮最大の祭典であり、香取神宮との深い関係をしめす御船祭^{みふねまつり}。勇壮・華麗な水上渡御^{とぎよ}で、息栖神社の先導船が大船団の先頭に立つ大役を務めているのをご存じですか？ 遠い昔から神事を大切に受け継いできた、地域の人々の思いに迫ります。



鹿島神宮の御座船



息栖神社の先導船

12年に一度の式年大祭

9月2日の早朝、「先導船 息栖神社」ののぼりを掲げ、五色の吹き流しや幕、大漁旗で飾られた船が常陸利根川に姿を現しました。鹿島神宮式年大祭「御船祭」の大船団を導くため、大船津へと向かっていきます。この日のために、息栖神社と氏子総代の皆さんは、1〜2年も前から準備を進めてきました。

御船祭というのは、鹿島神宮で12年に一度、午年^{うま}におこなわれる大祭です。9月1日から3日にかけておこなわれる神事の総称で、中でも御神輿^{みこし}を奉載した御座船^{ござふね}が、供奉船^{ぐふぶ}を従えて香取市加藤洲に渡る水上渡御は、壮麗を極め、水上の御船祭としては国内最大規模を誇ります。

その起源は古代までさかのぼり、



息栖神社



鹿島神宮式年大祭「御船祭」の大船団。先導するのは息栖神社の船(外浪逆浦)



息栖神社氏子総代会の猿田会長



折り返しの潮来の船着場河岸を出発する先導船



鰐川橋の下を通過する御座船

『常陸国風土記』に、舟を津の宮（現在の香取市）に納めるといふ約2000年前の故事が記されています。平安・鎌倉時代には、水上渡御がおこなわれるなど、現在の祭りに近い形がほぼ整えられたようです。戦国時代から江戸時代にかけて船による渡御は途絶えますが、明治3年（1870年）には大規模な御船祭が数百年ぶりに復活し、明治15年（1882年）以降は、12年に一度の大祭として、途絶えることなく今まで脈々と受け継がれてきました。

氏子の皆さんが守り受け継ぐ

息栖神社の氏子の皆さんがどのような思いで御船祭に臨んでいるのか、氏子総代会会長の猿田信守さんに話を聞きました。息栖地区（1〜7番組および息栖原）に住む氏子の中から、9人が順番に氏子総代（任期3年）を務め、総代会を運営しているそうです。まず、御船祭に向けた準備について聞きました。

「総代会の諸先輩にご教授をいただき、資料を見ながら段取りを話し合ってきました。昔からの伝統ののちって、船の飾り付けの準備、陣羽織や袴など装束の手配を済ませ、



息栖神社前の常陸利根川を巡回する先導船



大正から昭和初期の息栖河岸



息栖神社前の船だまり



堤防に集まった市民が手を振って見送る

当日が近づいて使用する船や接岸場所が決まると、総代全員で飾り付けをおこないます」

御船祭の伝統を大切にしてきた中でも、昔と今で変化したことはあるのでしょうか？

「昔は、常陸利根川での漁業や中洲での農業が盛んで、先導船の周囲にたくさんのお漁船や田船たふねが集まって見送りをしてくれたと聞いています。今では船を所有する方が減ったこと

に加え、航路や船の大きさなどの規定も厳しくなったので、そのような見送りはできなくなりました。また、前回(12年前)は大船津から先導船に

乗船し出発したため、神栖市の皆さんに披露する機会がありませんでした。そこで今回は、息栖神社前の常陸利根川を巡回するコースをとれる

よう、鹿島神宮に前もってお願いしました。先導船に乗船するのは、息栖神社の宮司さん、総代、ほか関係者など合計12人です」

猿田さんに御船祭の思い出話を聞いたところ、驚きのエピソードが飛び出しました。

「実は、私の父も36年前に氏子総代として先導船に乗船しております。氏子総代の順番が回ってくるのは一生

に一度のことです、私も1年ずれていけば御船祭の年に当たらなかったわけですから、偶然の巡り合わせに非常に驚いています」

地域の伝統が代々受け継がれ、今につながっていることを改めて実感しました。

市民に見送られ

先導船の大役を務める

御船祭は、9月1日に鹿島神宮に天皇陛下の御遣いである勅使ちよくしを迎える勅使参向例祭ちよくしさんこうれいさいから始まり、2日には陸路と水路を合わせて約31キロメートルを、神様と共に大行列が巡幸します。息栖神社では、午前3時に関係者が集合して装束に着替え、その後先導船に乗り込みました。一方、息栖神社前の常陸利根川堤防には、市民が続々と集まってきました。午前6時、先導船が常陸利根川をゆっくりと北上し、堤防前で大きく旋回して市民の見送りに応えます。1周目、2周目と、船上と堤防で互いに手を振り合い、最後の3周目には「行ってらっしゃい」の声が上がります。拍手が起きました。およそ15分間の見送りに、「12年に一度のことだから、先導船を見ることができて



外浪逆浦を通る大船団



鰐川橋と付近の堤防に多くの人が集まった



も継承してまいります」と言葉を送ってくれました。今後の継承について、氏子としての思いを猿田さんに聞きました。「鹿島神社から息栖神社先導船の命を受け、多くの皆さんの協力のもとで務めました。氏子総代には、文

よかった」と、感激の表情を浮かべる皆さん。今回が初めてという人もいれば、12年前に潮来河岸まで見物に行った人や、前日に鹿島神社で勅使参向例祭を見てきた人もいて、それぞれが御船祭への思いを語りながら余韻に浸っていました。

します。堤防はもとより鰐川橋にも鈴なりの見物客。遠くに先導船が見えると、これから目の前で繰り広げられる歴史絵巻への期待が高まります。華やかな飾り付けを施した大小の船が川面を彩り、極彩色の龍頭を飾り付けた御座船が圧巻の存在感を放ちながら悠々と進んでいきました。大船団は、鰐川から北浦・外浪逆浦を経て香取市加藤洲まで約2時間かけて巡航し、御座船の船上で香取神宮の宮司が祝詞をあげる重要な神事「香取神宮御迎祭」をおこないました。

団の水先案内を務め、大船津に戻ります。神事後、先導船は常陸利根川を南下して息栖神社に帰り、無事に大役を務めたことを主神(久那斗神)と相殿神(天乃鳥船神)に報告しました。翌3日には鹿島神社で行宮祭、還幸祭がおこなわれ、御船祭が滞りなく幕を閉じました。

地域の伝統を次代へつなぐ

息栖神社は御船祭について、「御神輿(神)が鎮まっておりますので、一生懸命に奉仕しました。鹿島神宮の式年祭が長く続く限り、息栖神社も継承してまいります」と言葉を送ってくれました。今後の継承について、氏子としての思いを猿田さんに聞きました。「鹿島神社から息栖神社先導船の命を受け、多くの皆さんの協力のもとで務めました。氏子総代には、文

神栖ディスカバリーを

カミスマカでも楽しめる



「神栖ディスカバリー」を、神栖市魅力情報発信ポータルサイト「カミスマカ」でもご覧いただけます。紙面で紹介しきれなかった情報やコラムなど、オリジナルコンテンツも掲載しています。ぜひご覧ください。

